ぎといった状況でしたので、何とか日刊通信は出せていたものの、外に向けて、月刊で何かを出すという作業は、とても出来そうな状態ではありませんでした。それを武さんは軽く（？）できている。困難を乗り越えてでも、自分の思いを外に向けて発信したい、というその執念ともいえる意欲が実行まで具現されている事が私にとって、とても魅力でした。

武さんに遅れること1年、「やまびこ会」を立ち上げ、毎月8ページ立ての通信を作り、全国に発信しはじめたのでした。

わずか9行の文章でしたが、「ECHOは創刊20年目に入りました」の文章を読みつつ、あんなこと、こんな事が思い出されてきたのです。

ECHOがストップしたら、「やまびこ」の実践も

インターネット時代の今、武さんはホームページを持ち、さらに、紙でも皆さんに伝えるという、誰も真似の出来ないことをやってのけています。郵便料金の値上げ、そして一カ月の入院加療のときには「口惜しいけど、止め時か」と思ったことがありました。でも、先発の武さんが走り続けてくれているので、私もフーフー言いながらも続けられていると言えます。武さんのECHOがストップしたら、私の1960年からの『やまびこ』の実践にも終止符を打つことになるのかもしれません。

学級通信「やまびこ」を引き継いだ「やまびこ会」の会報やまびこは、2007年11月のNO260号で終刊となった。次が山田さんの終刊のご挨拶だった。

断腸の思い　「やまびこ」の幕

始点があれば必ず終点がある。やまびこだっていつかは終点を迎えざるを得ない時が必ず来る。とは言え、47年も続けてきたこのささやかな実践。せめて区切りのいい50年は続けたいなあと思い「後ひと踏ん張り！」と自分の心にハッパをかけ、その後を過ごしてきたのですがいかんせん体調の悪化(中略)「50年続けたかったなあ」という思いが強いだけに、ここで「来年3月閉会」と宣言するのは断腸の思いです。

山田暁生さんが旅立ったのはお盆が明けた7月17日。「葬式無用、戒名不要、弔問供物一切固辞、故郷の地に散骨せよ」が遺言だった。私は、これらの言葉に山田暁生さんの限りない《無念さ》を感じると共に、山田さんの生き方を読み取るのだった。

合掌

返ってきたエコー

『新聞づくりの旅』　またお聞かせください

三嶽　雅彦

257号、拝読。あちこちでの講演、新聞活動の輪はますます広がっていくようです。講演のレジュメを読んでいると、嬉々として、新聞の話をされている武先生の姿が思い浮かびます。

私が担当している中学1年生は、校外学習のまとめとして壁新聞づくりをしています。学活や道徳の時間だけで製作しているので、一か月たとうとしているのに下書き段階のグループもある一方、既に完成して廊下にはりだしている班もあります。来週から始まる面談の日までには全新聞が廊下に掲示されるといいのですが。

記事が書けなくて困っている生徒に、「いきなり作文を書こうとしても無理だよ。その日あったことを箇条書きにしてみて、それをつなげて文章にしてみたらどうだ」と、軽いアドバイスをしました。記事をまとめることは難しいようです。

このところ疲れやすく、授業をやり終えるとフーツとため息をついてしまいます。4時間連続の授業となると、どうしてもこちらに余裕がなくなり、焦りが先んじてしまって、授業の中の説明も、生徒に対する返答も、早口になってしまいます。それを生徒に見破られることもあって、「今日、先生、怒っている？」などと聞かれてしまいます。《初々しさと情熱》をもった人達に助けられながら、またそういう人達から力を授かりながら仕事をしています。今の学校には若い先生は必要です。《初々しさと情熱》若い先生が期待される由縁です。

「500回目の講習会」を東中で行ったというのは凱旋パレードのようなものですね。原点に立ち返りられて、501回目を迎えられたのではないでしょうか。東中に新聞活動が根づいているのも、毎年行われている武先生の講習会のお陰と言ってまちがいありません。新聞を書くということが自然、伝授されていて、学級担任の先生の苦労はそれほどしなくても、いつの間にか生徒の間で新聞を書く習慣が作られていきます。その中で特に熱心に活動しようと思う生徒が出てきて、生徒会の広報委員長が生まれます。

笠井さんの「私たちPTA広報が、協力したい、応援したいと思うような学校づくり、教職員の態勢づくりをお願いします」という言葉は重いです。前の話を続けて言うならば《初々しさと情熱》もった先生方が元気よく働いている職場ということになるのでしょうか。

どうぞお元気にお過ごしください。そして『新聞づくりの旅』、またお聞かせください。